



～お葬儀屋さんのひとりごと～

忌み言葉について

お葬式で使ってはいけない言葉

「かさねがさね」「たびたび」「しばしば」「くれぐれ」「返す返す」「いよいよ」「ますます」「次々」…というように、言葉が繰り返される「重ね言葉」
「また」「再び」「再三」「続く」…というように「続く」をイメージされる言葉

「忌み言葉」というのは、お葬式や結婚式などで使ってはいけない、と言われる言葉です。要は「不幸が続く」ということになってはいけないので、と忌み言葉とされているのです。

忌み言葉については、所詮ダジャレみたいなものなんです。例えば、結婚式の終わりのことを「おひらき」って言います。普通、何かの会を終える時には「閉める」って言いますが、結婚式の時に「閉める」と言うのはゲンが悪いですね。ですから、「閉める」ではなく「開く」という言い方、言い換えをするというのが、忌み言葉の正体なんです。こういう言葉の使い方が出来たら良いね、という程度の事ですから、そんなに深くは気にしないで良いんです。使えどと気が利いてる、という類いのものですから、絶対に言わない、とか避けるべき、言わないべき、っていうほどのものではないと思います。

只、社会人ですから、口の訊き方には気をつけましょうねって事で、例えば、「うちのおじいちゃん、死んじゃってさー・・・」って言うより、「祖父が亡くなりまして・・・」って言ったほうが丁寧でしょ。まあ、そういう程度のもんです。重ね重ね、益々、っていう言葉も、これはお祝いの席で言う言葉で、お祝い事や幸せな事はどんどん増えていったほうが良いですけど、お葬式みたいな不幸事って呼ばれる事は、益々、重ね重ねなど、増えていかない方がいいことなので、言わないようにしましょうね、っていうのが、重ね言葉や忌み言葉の正体です。

言葉っていうのは、意味が伝わる事が一番大切なので、あまり気にしてしまっただけで喋れなくなるっていうほうが困ります。大切なのは相手に対する思いやりで、それがマナーの中では大切な事なんです。儀礼とかマナーっていうのは、頭の下げ方も含めて教育効果というのがありますから、そういう部分を大事にしていけば良いのかなと思います。形だけ気にして、この言葉はダメだ、あの言葉はダメだっていうのは言葉狩りみたいになっちゃいますから、もっと自由に気持ちを伝える事のほうが大事なのかなと思います。

たった一言の失言

[男性 34歳]

「お疲れさまでした」……。

なんの変哲もないこの言葉が、あんなに重みがあるとは思いませんでした。3年前、肺がんの治療で入院していた父の容態が急に悪化し、出張先からあわてて帰宅。医師から2～3日がヤマだと聞かされた。「葬儀屋を探さなくては…」とっさにこのことが頭に浮かんだ。段取りが全くわからない。地元で長く住むKさんに信頼できる業者を紹介してもらい、色々アドバイスも頂戴した。もしものことがあったらよろしく、とあたふたと病院へ戻った。父が帰らぬ人となったのは、その翌日の夕方だった。

「喪主役は長男のおまえに任せる。お父さんのために、頼むよ」と涙にしながら話す母。私の心の中では、張り裂けんばかりの悲しみと、ずっしり重い葬儀の責任感が交錯した。親族や世話になった人への連絡、会場の設定、通夜、葬儀、火葬。怒涛のごとく2日間が過ぎ去った。そしていよいよ最後の行事、初七日の準備だ。心身共々たたくただが、段取りがうまくいったことで、心地良い疲れを感じる。34才にして初めて知り得たしきたりの数が、なんと多かったこと。すごい体験をしたという満足感と、周囲から「よくやった」というお褒めの言葉。うれしさで舞い上がり、体から力が抜けた。

悲劇はそのあと起こった。初七日の準備が整い、会場に親族一同が並び、すくくと挨拶に立つ。元気に口に出たのがこの言葉だった。「みなさん、お疲れさまでした！」叔父達がざわめく。手でバツ印を作る長老。母からは小さくヒジ鉄。故人を送る厳粛なセレモニーなのに、まるでひとつの仕事を片付けた時のような軽率な言葉。気づいた時はすでに遅かった。赤面し、目がぼろろと滲む。ああ、よりによって最後の最後でのドジ。人間、気持ちに正直であればいい、なんていうのも時と場合によりけりだなあ。今でも、この言葉を発するたび、当時を思い出す。本当に恥かしかった。親父、ごめんな。

